

雜聞

△六月の給ハガキ競技會は、丁度一週年といふので、青梅からは小林珠郎君が出て来る、木曜會では巖谷小波、同爽日、千葉紫艸の諸氏、さぬた會の柳川春葉、木村光太郎兩氏も見え、其他客員眞野紀太郎君を始め、五六の會員も集まつて、申々盛會であつた。

△さていよ／＼選評にかゝつた所、千葉君の出品に、軍艦のマストに黄の丸をかいた旗のある給があつて、それは「竹」だといはれたが、誰も其眞意味を解するものがない。一體この黄の丸のものは何かときいたら、親王旗だといふ。いよ／＼解らなくなつたが、詰りは竹の園生といふ洒落であつた。

△竹の園生は、かく惨たる苦心に成つたものであつたが、「竹」は生憎技術の方の課題であつて、高點を得られなかつたのは、いさゝか御氣の毒に存じた。

△ハガキの分配が済んでから、則席給ハガキの交換をやつた。題は「匂」で、十五分間限り、早い人は二三枚も出来た。夜行巡壺の嗅つけ、火葬場の煙突など尤も振つた

ものであつた。

△夕飯の済んだ時、こんな給ハガキが来た。これは太田南岳子が、この間からの齒痛で、



今日往かれぬは残念だと、四谷の天から目白坂を覗んでよこしたのだ。

△これを見た一同は、いで南岳子困らせの給ハガキを作らうと、いふかと思へば見てゐる間に、忽ち一ダース斗り出来上つた。そして互の趣向を比べ合つては、あちらでもこちらでもアハ、ハ、ハと大笑ひ。百本

抗を亂抗齒に利したもので、五色の息を吐いてゐるのや、今抜たばかりの血だけの齒から、芋虫のやうな奴が動いづゐる薄氣味のわるいのもあつて、その上文句入りだか

ら堪らない。これを見たら、南岳子は定めし齒の痛みも忘れて仕舞ふであらう。

△それから、不參の人々へ出す合作のハガキをかいて、九時頃散會したが、半日笑い通しの、極めて愉快な會合であつた。

△近頃種々なる文學美術雜誌に、口繪や挿繪を描かれてゐる丸山晚霞氏は、水彩畫の大家で、多年郷里なる、淺間山下に在て研究を積まれてゐたが、此秋からは東京に居を移さるゝ筈である。

△氏が東京に來られたら、本誌のために大に盡力さるゝ約束で、猶都合によつては、水彩畫の研究所を開いて、斯道に熱心な人々に教導の勞をとらるゝ考もあるとの事である。吾々は氏の出京の、一日も早からんとを切望する。

寫生會

SK會 所在、岡山縣赤磐郡征岡村○會員七名○毎土曜日尋常小學校に集會○隔週日曜日野外寫生○寫生畫は等級を附し、優等なるものをアルバムに貼して保存す(會長折藤英吾氏)

臨本及書籍の批評は次號に
來月は給ハガキ扱の模樣を變へます